

第2節

中小企業の景況は回復傾向

1. 景況は回復傾向

主要中小企業業種の景況判断は、平成14年1～3月期を底に、16年も持ち直しの動きが続いた。10～12月期は低下したものの基調として回復傾向であった。下請中小企業の景況も16年は緩やかながら回復基調が続いた。

(主要業種の景況は回復傾向)

大阪府内主要中小企業36業種の景況総合判断DI(「景況上昇又は高水準維持」業種割合－「景況下降又は景況不振」業種割合、平成16年10～12月期から40業種)をみると、14年1～3月期を底として持ち直しに向かい、16年も、10～12月期は気温が高かったことで繊維関連業種が落ち込んだことからマイナスとなったものの、基調として回復傾向であった(図表Ⅱ-3-5)。

回復の背景としては、設備投資関連業種の受注が、民間設備投資の回復や、堅調な輸出に支えられたことがあげられる。

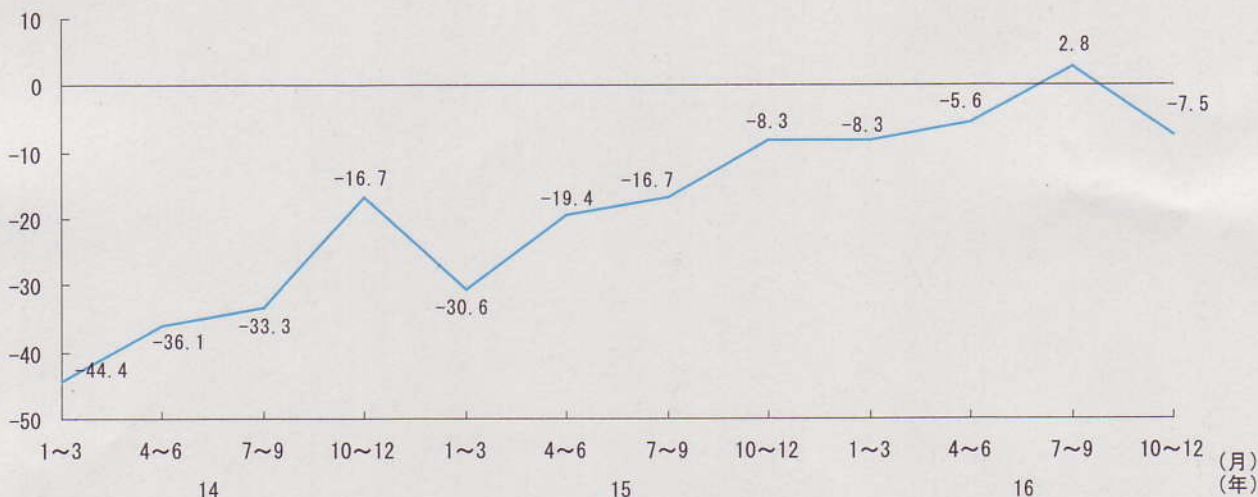
(下請中小企業の受注は緩やかに回復)

府内下請中小企業の受注量、受注単価及び採算の各DIをみると、受注量DI(「増加」企業割合－「減少」企業割合、前期比)は、15年11月末にプラスに転じた後、回復基調のまま推移した(図表Ⅱ-3-6)。

発注元の企業は、これまで生産調整や国内生産の縮小などを進めてきたが、設備投資の増加や輸出の堅調、さらには取引先の海外生産の見直しなどを背景に、下請企業への発注を増加させる動きが強まった。

受注単価DI(「上昇」企業割合－「下降」企業割合、前期比)も、16年5月、9月にはプラスになるなど緩やかな持ち直しが続いた。ただ、受注単価の引き下げ

図表Ⅱ-3-5 大阪府内主要中小企業36業種の景況総合判断DIの推移



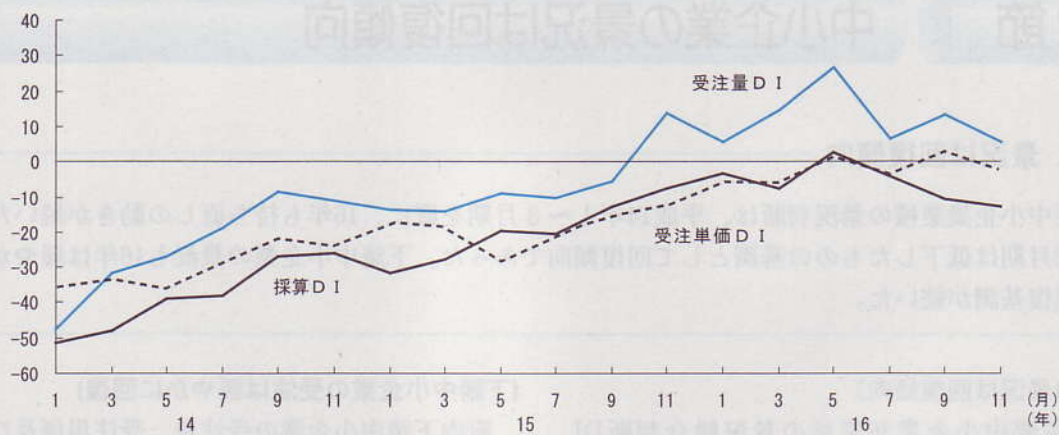
資料：大阪府立産業開発研究所「中小企業景況観測調査(中小企業の動き)」。

(注) 1. 調査対象の36業種は次のとおり。

綿スフ織物、タオル、ニット製品、毛布、敷物、紳士服、布帛縫製品、磨棒鋼、鋳鉄铸件、鍛工品、線材二次製品(鉄線・針金・釘)、ねじ、建築金物、金型、作業工具、産業機械、自転車・同部分品、印刷、段ボール、ガラス製品、鏡、眼鏡、プラスチック成形品、人造真珠硝子細貨、洋傘・同骨(以上は製造業)、織物、ニット、繊維二次製品、化粧品、医薬品、鉄鋼、機械器具、家具、中古自動車(以上は卸・小売業)、デザイン、ソフトウェア(以上はサービス業)。

2. 調査業種は平成16年10～12月期から従来の36業種に、機械設計、広告、ゴルフ練習場、ボウリング場の4業種を加え40業種となった。
3. 景況総合判断DI = 「景況上昇又は高水準維持」業種割合－「景況下降又は景況不振」業種割合。

図表Ⅱ-3-6 大阪府内下請中小企業の景況判断DI(前期比)の推移



資料：財大阪産業振興機構「下請取引動向調査」。

(注) 1. 集計対象は財大阪産業振興機構登録企業で、従業員10人以上の法人企業200社。

2. 受注量DI = 「増加」企業割合 - 「減少」企業割合、
 受注単価DI = 「上昇」企業割合 - 「下降」企業割合、
 採算DI = 「好転」企業割合 - 「悪化」企業割合。

要請は厳しく、改善のテンポは遅れている。

採算DI(「好転」企業割合 - 「悪化」企業割合、前期比)は、16年5月までは緩やかに回復してきたが、

それ以降は原油価格や鋼材価格の上昇など、原材料価格の高騰がコスト圧迫要因となって、16年後半は悪化に転じた。

2. 設備投資関連が好調

業種別にみると、消費関連業種は、低迷業種が引き続きみられるものの、在庫調整の進展や国内製の見直しから、販売の減少に歯止めがかかる業種が出てきた。建設関連業種は、住宅建築が一進一退ながら前年の水準を下回る動きとなり、工場、店舗、倉庫など非住宅では設備投資の回復に伴う増改築の動きが広がるなど、全体として受注は底堅く推移した。設備投資関連業種は、自動車関連や輸出向け機械関連に支えられて、受注の増加が続いた。

(1) 消費関連業種は持ち直しの兆しも

消費関連業種は、低迷業種が引き続きみられるものの、在庫調整の進展や高付加価値の国内製品が消費者に見なおされつつあることから、販売の減少に歯止めがかかる業種が出てきた。

(繊維関連業種は高品質化で減少に歯止めも)

「綿スフ織物」の受注は、流通業者が品質面で遜色のない海外製品の調達を増やしているものの、在庫調整が進展していることや、消費者の高級品志向の高まりを受けて、国内製品が見直されるようになったことから、減少に歯止めがかかりつつある。こうした中、織り方の工夫や新素材の使用により輸入品や国内他産地に比べて優位性を確保している企業では生産が増加した(図表Ⅱ-3-7上)。

「タオル」「毛布」は輸入品の国内市場に占めるシェアが高まる中で、受注は小口・短納期となり、国内生産は低調に推移した。また、タオルの原材料である綿糸は平成15年11月頃から急騰し、16年半ばまで高値で推移したことから収益は悪化した。これに対して各社とも高付加価値品の取組みを強化しており、例えば、タオルでは環境に配慮した製品(有機農法栽培による綿から作った糸の使用、酵素による精練等)がみられた。

「敷物」のうち、タイルカーペットは改築やリフォーム向けに増加したが、主力のロール物は低調に推移した。

「布帛縫製品」「ニット製品」は輸入品の影響により低調であるが、素材や生地加工に特徴のある製品(マイナスイオン、抗菌加工等)で動きがみられた。また、ニットではデザイン、素材、機能に特徴ある商品作りを進めている企業も見受けられ、受注改善を目指している。

「紳士服」は専門小売店が海外生産比率を引き続き高めたため、国内生産は低調に推移した。ただ、速乾性に優れた新素材を使った商品や消臭・抗菌作用のある素材を使ったスーツは好調に推移したことから、国内生産の減少に歯止めがかかる動きも出てきた。

(雑貨・その他の業種は低調ながら一部で動き)

「段ボール」は、主力となる家電製品向けがデジタル家電関連の好調を受けて、飲料・食品向けも夏の猛暑の影響を受けて増加した。また、通信販売向けも堅調であった。

「印刷」は、設備が過剰な状況にあり、稼働率を維持するため、厳しい受注競争が続き、単価は下落している。さらに、ユーザーによる印刷物内製化の動きや、電子媒体に置き換える動きが強まっており、受注の減少が続いた。

「眼鏡」は偏光レンズを使った新製品や防塵用眼鏡などの受注は引き続き好調であるが、それ以外の受注は横ばいから弱含み傾向であった。

「ガラス製品」のうち、家庭用はコップや食器で低価格の輸入品が増加し低調である。産業用も全般には低調であるが、電子部品用ガラスはやや強含みで推移した(図表Ⅱ-3-7下)。

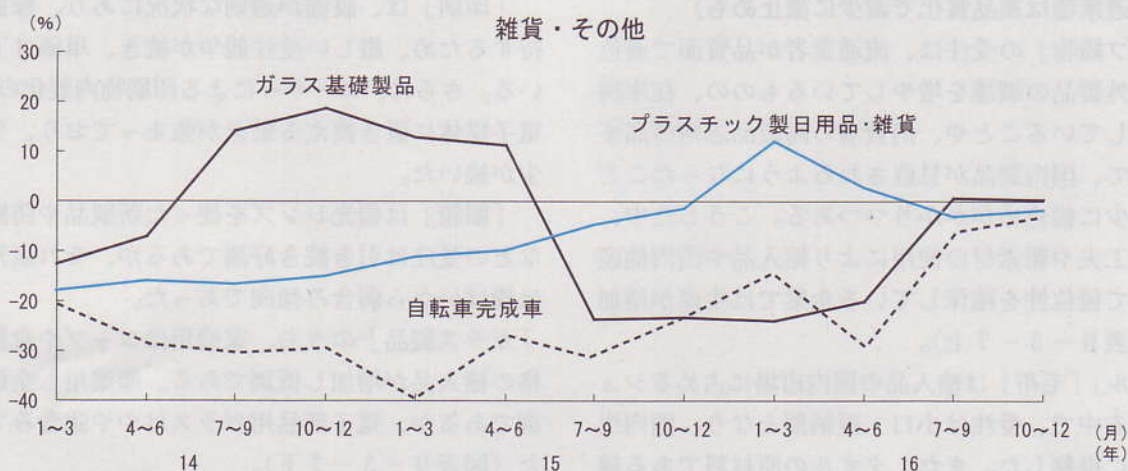
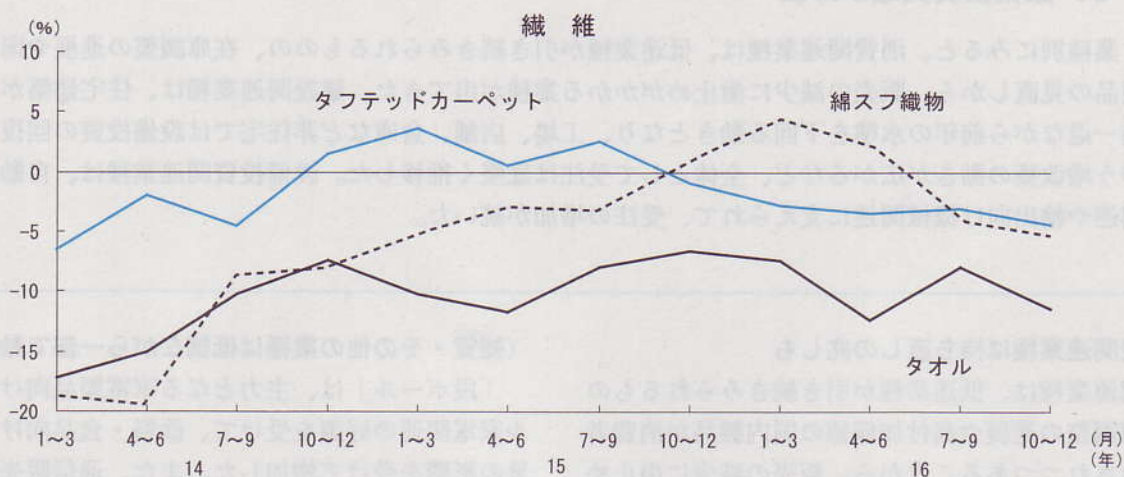
「鏡」のうち、化粧品向けは競合する輸入品の増加から弱含みとなっており、自動車向けバックミラーも輸入品が増加し、自動車生産の増加にもかかわらず、受注は横ばいとなった。ただ、国内製の新製品を中心に年後半にかけて増加の兆しが出てきた。

「人造真珠硝子細貨」の需要は弱含みが続いたが、一部企業ではイヤリング、アクセサリ等の新製品を企画し売上げが増加した企業もみられた。

「洋傘」は、年間降雨日数が多かったため、低価格帯の販売は好調であったものの、デザイン性や機能性のある高級品は期待したほどの伸びではなく、販売は総じて横ばいで推移した。

「自転車・同部分品」をみると、完成車の生産は低価格輸入車が続くシェアを拡大していることから減少し、部品も完成車の生産減少や完成車メーカーが中枢部品(変速機、ギヤクランク、ハブ等)以外を輸入部品へ置き換える動きが続き、減少が続いた。こうした中、業界では独自の安全基準を作り、その基準に適合する国内製品が安価な輸入車より安全であること

図表Ⅱ-3-7 消費関連業種の生産数量の推移（前年同期比）



資料：綿スフ織物とタオルは業界団体作成資料、他は近畿経済産業局『主要製品生産実績』。

を強調し、販売拡大に努めている。

「ゴルフ練習場」の売上げは、天候不順の日が多かったものの、女子プロゴルフ人気や12月中旬まで暖かい日が続いたことなどにより、利用者数が堅調に推移し、増加した。

「ボウリング場」の売上げは、全体として減少した。大手業者が積極的に新規店舗をオープンしている影響で、一部の業者を除いて苦戦した。

「フィットネスクラブ」の売上げは、中高年層の会員が増加し、整体、インストラクターによるマンツーマン指導などのフィットネス関連サービスの収入が増加したことから、増加した。

(流通段階での業況は弱含み)

繊維・雑貨関連卸売業は、主たる販売先である小規

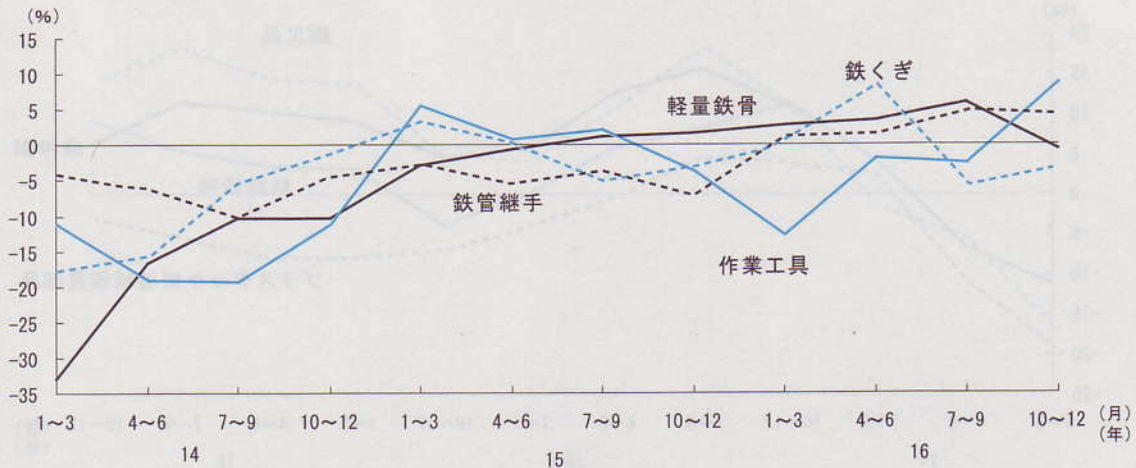
模小売店で、量販店や製造小売との競争が激化したことから、低調に推移した。また、10~12月期に気温が高かったことも加わって秋冬物の受注が減少した。

「繊維二次製品卸売」「ニット製品卸売」の販売は、弱含みで推移した。16年は降雨量が多く、残暑や10~12月期に気温が高く推移するなど天候不順が続いたため、低迷した。

「化粧品卸売」は、若年層向けの雑貨や携帯電話ストラップ、ぬいぐるみなどの受注は好調であるものの、ヘアー・洋服ブラシ、バッグ、化粧鏡などは減少し、受注は横ばいで推移した。業界ではメーカーと共同で展示会の開催を行い新製品をアピールし、受注獲得に努めた。

繊維・雑貨関連以外の業種をみると、「医薬品卸売」

図表Ⅱ-3-8 建設財関連業種の生産数量の推移（前年同期比）



資料：近畿経済産業局『主要製品生産実績』。

の販売高は患者の医療費自己負担率の上昇等、相次ぐ医療費抑制策の浸透により薬剤需要が減少したことから弱含みが続いた。また、10~12月の気温が高めに推移したことから例年に比べ風邪等の罹患者数が減少し受注は弱含みとなった。また、大手卸業者間の競合が激化し、販売価格が低下傾向で推移し、収益が悪化した。

「家具卸売」は、マンション等の着工が増加していることを反映して、別注の応接セットなどが増加傾向であったものの、作り付け収納家具が増えていることで、箱物家具（タンス、棚等）は低調であった。

「中古自動車販売」は、一部の人気車種については需要が堅調であったものの、新車の買い換えサイクルが長期化しているため、仕入れが困難であった。また、ガソリン価格の上昇から、購入の中心が燃料消費の少ない軽自動車に移る傾向が顕著になったが、業者にとっては利幅が小さくなるため、収益は悪化傾向となった。

(2) 建設関連業種の受注は底堅く推移

建設関連業種をみると、公共事業は引き続き低調であるものの、全国ベースでは、住宅建築が一進一退ながら前年の水準を下回る動きとなり、工場、店舗、倉庫など非住宅では設備投資の回復に伴う増改築の動きが広がった。その結果として、全体として受注は底堅く推移した。

「線材二次製品」は、建築向けの受注は弱含みであったものの、自動車向けが好調で全体では受注は増加した。鋼材価格の上昇分は製品価格に転嫁できたが、受注先の抵抗が強くこれ以上の価格転嫁は困難になると

懸念されている。(図表Ⅱ-3-8)。

「作業工具」の生産は、東南アジアからの輸入品の影響が大きく、横ばいとなった。ただ、内需が徐々に増加しており、明るい兆しもみえた。こうしたなか、業務用の高級工具や電動工具などの取り扱いを始めることにより売上げを確保している企業もみられた。

「建築金物」「鉄管継手」のうち、「建築金物」はバリアフリーや防犯機能を高めた製品は好調であったものの、既存製品の単価は低下傾向が続き、受注は横ばいから微減となった。「鉄管継手」は工場、店舗、倉庫の増改築向けに受注が底堅く推移した。

「鉄鋼卸売」で扱うH形鋼や棒鋼は国内需要の増加を受け販売量は強含みとなった。採算は、価格改定が進捗し黒字基調で推移した。

(3) 投資関連業種の受注は増加

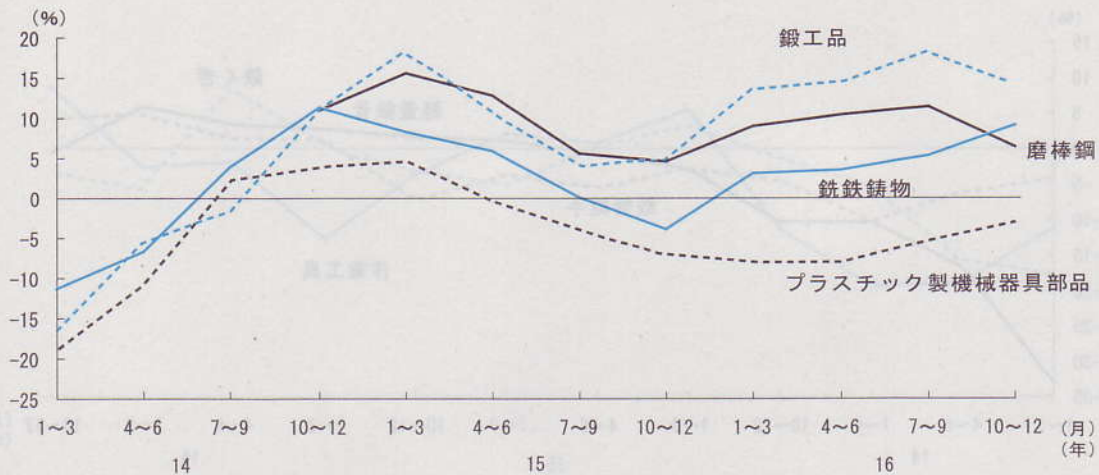
設備投資関連業種は、自動車関連や輸出向け機械関連に支えられて、受注の増加が続いた。収益面では主要原料である鋼材の価格が上昇するなか、受注価格への転嫁の遅れから厳しい状況が続いた。

「金型」の受注は、自動車部品向けが堅調に推移したが、DVDや携帯電話向けがピークを超えたため、受注の伸びは鈍ってきた。ただ、受注残は各企業とも豊富に抱えており、仕事自体は繁忙状態であった。

「磨棒鋼」は、自動車向けや一般機械関連向けの受注は増加した。しかし、製品価格の改定が仕入棒鋼価格の上昇に追いつかず、収益は厳しい状況であった(図表Ⅱ-3-9)。

「ねじ」も自動車向けや機械関連向けを中心に、受

図表Ⅱ-3-9 生産財関連業種の生産数量の推移（前年同期比）



資料：磨棒鋼は業界団体作成資料、他は近畿経済産業局『主要製品生産実績』。

注は増加基調で推移した。しかし、原料価格の上昇分の製品価格への転嫁が円滑に進められず、収益面ではとんとん状況であった。

「鍛工品」は自動車、工作機械向けなどの受注が好調であった。しかし、鋼材の値上がりや燃料価格の高騰のため生産コストは上昇した。

「銑鉄鋳物」は工作機械・産業機械向けなどの受注が好調であった。ほとんどの企業が受注残を豊富に抱えているが、鋳物用銑鉄、鉄くず等の原料の価格上昇分を製品価格に転嫁することができず、収益は厳しい状況であった。

「プラスチック製品」のうち機械器具部品の受注は、自動車向けが排ガス低減、燃費の向上など新たなプラスチック部品に対する需要が拡大したほか、デジタル家電関連部品も好調に推移し、強含みとなった。しかし、日用雑貨品は、海外からの低価格品の流入が続いたことから、受注は低迷した。

「産業機械」の受注は、土木・建設機械や金属加工・工作機械を中心に強含みで推移した。

「機械器具卸売」の販売は、自動車やデジタル家電関連の生産拡大を受けて工作機械の出荷が増え、それに用いられる切削工具などの需要も拡大するなど、好調に推移した。

「鉄鋼卸売」のうち、機械部品等に加工される鋼板やパイプの販売は順調に推移した。

（対事業所サービス業の受注件数は増加）

対事業所サービス業のうち、「ソフトウェア」をみると、IT投資が徐々に活発化したことを受けて、受注件数はやや増加した。しかし、受注案件は小口化し、

金額面では横ばいから弱含みで推移した。

「デザイン」は地方自治体の需要が減少し、民間も顧客による内製化傾向が強まったことから、受注は弱含みで推移した。ただ、中小企業がデザインを考慮した製品作りを意識し始めていることから、製品デザインに関する問い合わせが増加し、ビジネスチャンスの兆しもみえた。

「機械設計」は特殊な技術や高価な開発設備を保有している企業は、自動車、航空関連業界からの受注を獲得しているものの、そうした企業は一部に限られ、多くの企業は単価の低い業務であっても受注を獲得せざるを得なかった。そのため、業務自体は繁忙であるものの、売上げは横ばいで推移した。

「広告」の受注は、16年前半はオリンピック関連需要や家電量販店の広告で増加した。年後半はそれらの需要は一服したものの、年末年始のバーゲンや、マンションを中心とした不動産広告が下支えし、受注は横ばいで推移した。

（4）輸出は堅調

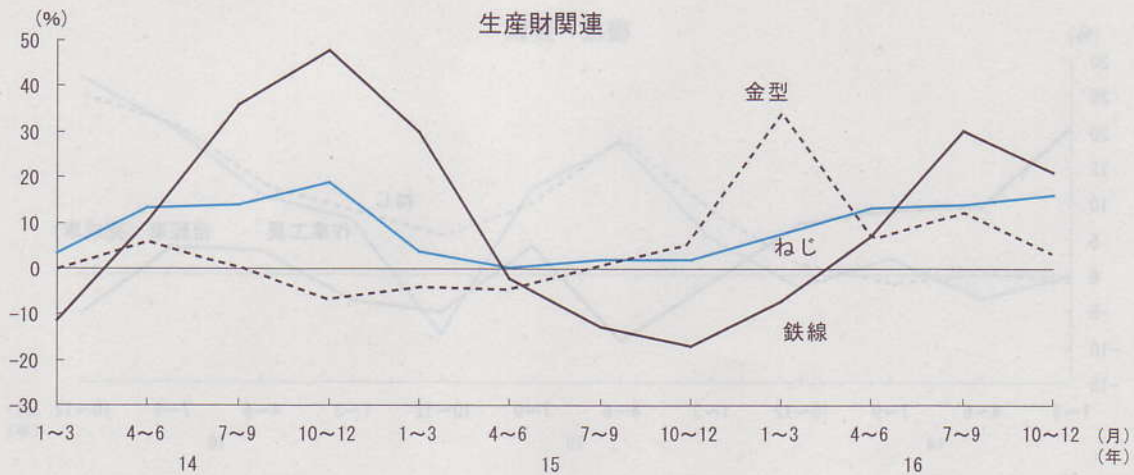
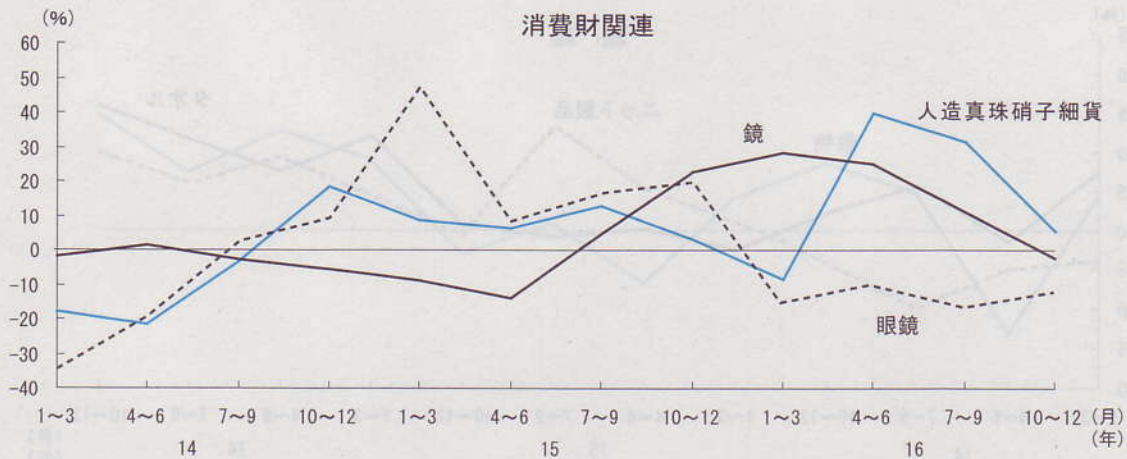
円ドル相場は年央に、円安となったものの基調としては円高傾向であった。しかし、中国を中心とする海外需要が好調であったことから輸出は堅調に推移した。

消費財関連の輸出のうち「人造真珠硝子細貨」、「鏡」については、16年は金額が低いものの増加した。ただ、年末にかけて伸び悩んだ（図表Ⅱ-3-10上）。

「眼鏡」は16年は低調に推移した。

生産財関連の輸出は、「ねじ」、「金型」、「鉄線」がアジア、特に中国向けを中心に大きく増加した（図表

図表Ⅱ-3-10 輸出関連業種の輸出金額の推移（前年同期比）



資料：財務省『日本貿易月表』。

Ⅱ-3-10下)。

(5) 輸入は増加

国内経済が比較的好調に推移し、前年に比べ円高傾向で推移したことなどから、輸入は、繊維製品や生産財を中心に増加した。

繊維製品では、「タオル」「敷物」「ニット製品」は、16年を通じて増加基調で推移した（図表Ⅱ-3-11上）。国内市場における輸入品のシェアはここ数年で飽和状態に近づいたとされていたが、流通在庫の調整が進展し、中国で高品質の製品が手掛けられたことなどから増加した。

機械・金属のうち、「自転車（完成車）」の輸入は、

16年年央は増加したものの、輸入在庫の増加から減少した（図表Ⅱ-3-11中）。

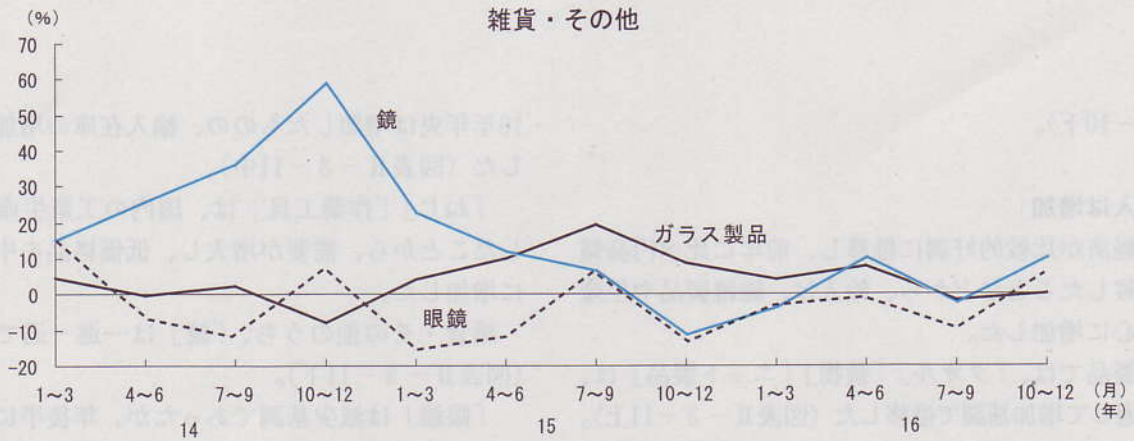
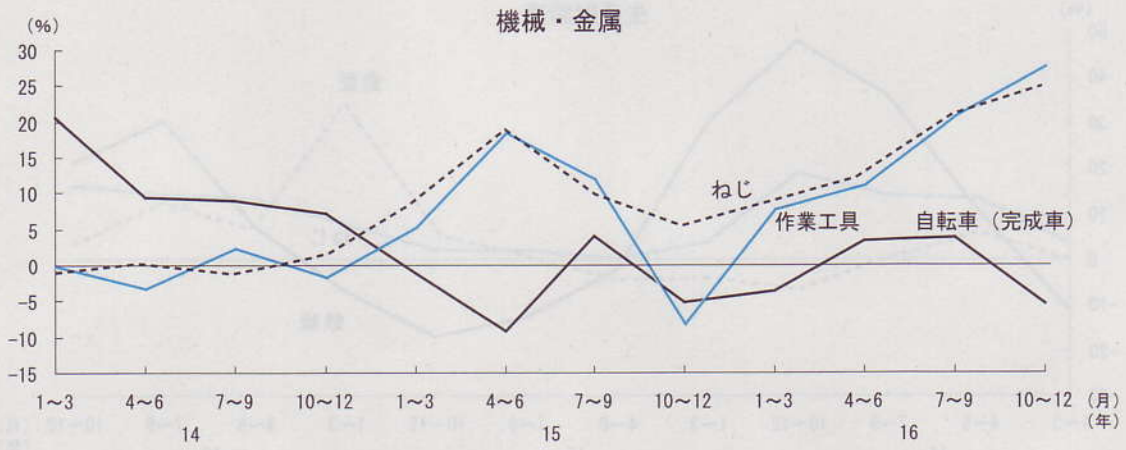
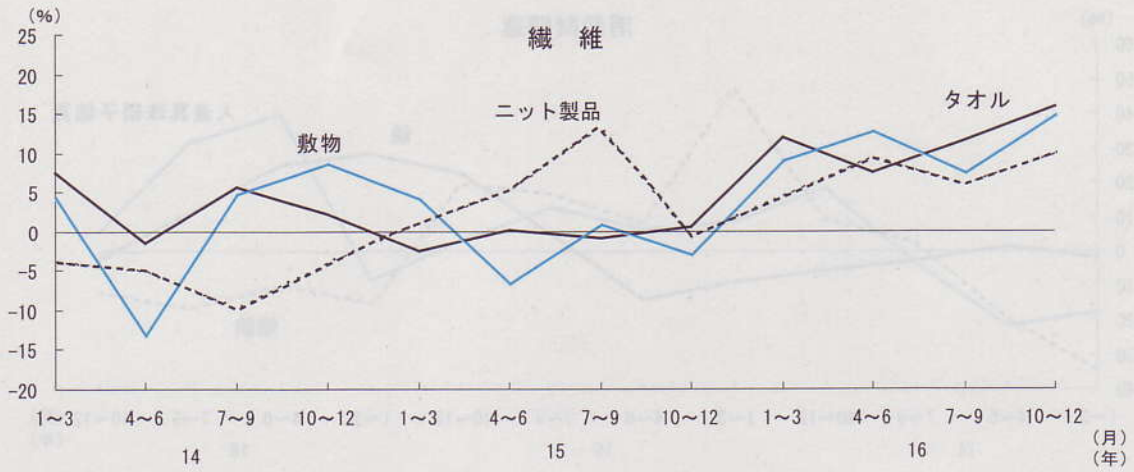
「ねじ」「作業工具」は、国内の工業生産が活発化したことから、需要が増大し、低価格品を中心に大幅に増加した。

雑貨・その他のうち、「鏡」は一進一退で推移した（図表Ⅱ-3-11下）。

「眼鏡」は減少基調であったが、年後半には中国製品の増加が目立った。

「ガラス製品」は、中国から低価格のコップや眼鏡レンズの素材の輸入、ヨーロッパからは高級ガラス製品の輸入がみられたが、年後半には増勢が鈍化した。

図表Ⅱ-3-11 輸入競争業種の輸入金額の推移（前年同期比）



資料：財務省『日本貿易月表』。